

平成23年度国立岩手山青少年交流の家施設業務運営委員会議事要旨

日 時 平成23年11月22日(火) 13:00~15:30

場 所 国立岩手山青少年交流の家 第1研修室

出席者 (施設業務運営委員)

阿 部 幸 子	滝沢村立一本木小学校 校長
上 野 カナエ	滝沢村グリーン・ツーリズム推進協議会 会長
大 石 泰 夫	盛岡大学 文学部長 教授
戸 部 裕 隆(代理)	秋田県教育庁 生涯学習課 社会教育班 副主管(兼) 班長
加 藤 泰 郎	北松園中学校 教諭
主 濱 恵 悦	滝沢村子ども会育成会連絡協議会 会長
神 初 見	(株)IBC岩手放送 取締役 管理本部長
岸 真 英(代理)	(株)岩手銀行 巢子支店長
石 川 正 悦(代理)	盛岡農業高等学校 副校長
月 舘 法 弘	青森県教育庁 生涯学習課長
佐 藤 敦 士(代理)	岩手県教育委員会 事務局 生涯学習文化 主任社会教育主事
西 村 晃 一	宮城県教育庁 生涯学習課長
福 田 朋 美	施設ボランティア(盛岡大学 文学部4年)
村 上 幸 子	(株)マ・シェリ 編集長
遠 藤 正 紀(代理)	滝沢村教育委員会 教育部長
横 澤 繁	岩手県レクリエーション協会 理事長

(職員)

太田所長、奥村次長、佐々木(千)主任企画指導専門職、國安企画指導専門職、相澤企画指導専門職、鈴木(和)企画指導専門職、田口事業推進係長、佐々木(崇)管理係長、八重樫総務係長、鈴木(啓)管理係員

1 挨拶(所長)

2 日程・資料等の確認(次長)

3 施設業務運営委員及び職員の紹介

4 委員長・副委員長の選出

国立岩手山青少年交流の家施設業務運営委員会規程第4条第1項に基づき、大石委員が委員長に互選され、大石委員長が阿部委員を副委員長に指名した。

5 説明

①資料1~3に基づき、施設の業務運営全般について所長から説明を行った。

②資料4~10に基づき、今年度の教育事業について説明の他、昨年度の利用状況、当施設におけるボランティア活動、広報プロジェクト、当施設に関する記事関係、予算と施設整備等について説明を行った。

6 審議

意見・質疑応答(※以下、○→委員からのご質問・ご意見、▲→当施設からの回答)

○: 青少年教育振興機構が事業仕分けの対象になったが、今後の見通しはどのようなになっているのか?

▲: 現在、事業仕分けのフォローアップとして行政刷新会議の第一ワーキンググループで検討されているが、自治体・民間への移管ということは既に結論付けられている。しかし、文部科学省の調査の結果、移管を希望する自治体は無く、また民間についても運営予算を一緒に付けない限り移管を引き受ける団体はないというのが現状であり、具体的な見通しは立っていない。

○: 滝沢村としても受け入れは非常に難しい。しかし、全国の市町村と連携を取りながら、引き続

き国に運営をしていただき、施設の存続を求めています。

- : 今回の震災を受けて、地域のコミュニティーの取りまとめや再生ができるコーディネーター・指導者の養成は非常に重要であると感じたが、被災地域にある施設として、このことに対してどのように考えているか？
- ▲ : 自然体験活動の指導者を2万人養成することを目的として「自然体験活動指導者養成研修」を文部科学省からの委託事業として行っているほか、「体験活動支援セミナー」といった教育事業がある。その他、各教育事業において施設ボランティアを運営に携わらせることを通して、指導者の養成を行っているところである。
- : 従来型の自然体験活動の枠にとらわれず、より広く社会教育活動に従事し、また指導する人材を育成することは、機構の一つの使命と考えられる。今回の震災においては、公民館の分館活動が上手くいっているような、地域コミュニティーがしっかりしている地域では、地域住民自らが率先して役割分担をして自炊をやり始めたり、避難所においても大人に混じって子供たちが積極的にボランティア活動に関っていくという姿が見られた。被災県にある施設として、ボランティア育成プログラムの開発や提出を機構本部に対して提言することは非常に重要であると考えられる。また、この機構が生き延びていくための一つの大きな役割として受け止めていただければと思う。
- : 少年院と連携して行った教育事業である「Peaceful」について概要を伺いたい。
- ▲ : 退院直前の院生を少年院から外に連れ出し、登山活動や創作活動を体験させた事業だが、院外の社会に触れさせられる場を少年院の方でも探していたこともあり、お互いの思いがマッチすることによって実現した事業である。
- : 農業体験として、施設のコーディネートによって、子供たちを半日ローテーションで受け入れたが、半日では子供たちと親しくなれないなど、受け入れる方として対応が大変であった。この点について、来年以降は配慮をお願いしたいがどうか。
- ▲ : 今回は受け入れていただける農家の数に対して、受け入れてもらう子供たちの数が多かったため、農家の方々にはかなり負担をかけてしまい大変反省している。そこで、逆をお願いする形になるが、受け入れていただける農家の数をもう少し増やしていただけないか。そうすれば1日体験という形でプログラムを進めることができる。
- : 自然体験活動、指導者養成研修その他の教育事業全般について、どのように広報を行っているのか？
- ▲ : 基本的にはホームページに掲載するとともに、各教育委員会にチラシを配布している。その他、対象者が小学生の事業については、近隣市町村の小学校に依頼して、児童全員にチラシを配るようにするなど、事業に応じた広報を行っている。なお、「テンパーク広場」の際には、沿岸地域の小学校全てにチラシを配布した。
- : 応募者多数のため参加できない方が多くいた教育事業があったとのことだが、概要を伺いたい。
- ▲ : 「テンちゃれくらぶ夏」では、応募者多数のため抽選によって参加者を決定したが、かなりの方が落選することになってしまった。その後、落選した方々から非常に残念であるのご意見を多数いただいたので、落選した方々を対象として「テンちゃれくらぶ秋」を企画した。「テンちゃれくらぶ」は、委員の中にも施設ボランティアの福田さんがいらっしゃるが、福田さんを中心とした施設ボランティアが本当に頑張ってくれた事業である。当該事業は大学生や高校生のお兄ちゃん、お姉ちゃんとすごく楽しい宿泊体験ができると、口コミで広がりをみせており、リピーターも多い事業である。
- : 私の場合、息子が学校でもらってきたチラシで事業の存在を知り、息子が友達と一緒にいきたいということで、複数での申し込みとなった。少なくとも村内の小学生の間では、よく周知されていると思う。
- : 「フォーラムニューリーダー」について、当初、本年度で最後とする予定だったのはなぜか？
- ▲ : 機構の中期目標の中で、地域に十分根付いた事業は地域にまかせるようにし、国立施設として行う事業は新しい、緊急の課題に対応するものとするよう記載がある。「フォーラムニューリーダー」は今回で27回目となり、各地域で独自に同様のフォーラムが出来てきているのを受

けて、当施設として行うフォーラムは今年度で最後とする予定であった。しかし、実際に地域の学校に引継ぎをしようとしたところ、出張に係る事務手続き上の問題等、国立施設で行うのでなければフォーラムを存続出来ないことが多々あることが判明し、継続することを決定したものである。

○：復興支援の事業については、今後、年単位の長いスパンで開催して欲しいがどうか？

▲：継続していかないと復興支援に繋がらないと認識している。

○：復興支援の事業を実際にやってみた印象はどうか？

▲：「テンパーク広場」では、沿岸から来た被災した親子が内陸部の家族と触れ合うことができ、楽しかったとの感想や、観客参加型の演劇に参加できて非常に楽しかったとの感想を得ており、非常にやって良かったと考えている。また現在、NPO法人NICEと連携して陸前高田の子供たちを支援するというプロジェクトを進めており、復興支援に関する事業はさらに増えていくだろう。「岩手しぜんとあそぼ in テンパーク」については、岩手県レクリエーション協会理事長の横澤委員にご意見をお伺いしたい。

○：釜石と大槌の小学生を対象に40名の定員で募集したところ、第1回目(夏)は30数名の参加であった。子供たちはいろいろな学校から集まった子供たちであったが、移動のバスの中でのレクリエーションによりすぐに打ち解け、非常に内容の濃い活動ができた。この時に参加した子供たちの口コミにより、第2回目(秋)のキャンプにおいては40名の募集に対して約80名の応募があり、結局その人数で実施した。この中には、夏のキャンプのリピーターも多く含まれていた。また、アンケートの結果、冬の事業にも参加したいとの記載が多くあった。事業の中身としては、やはり施設ボランティアや岩手大学の学生等、若いお兄さん、お姉さんと一緒に活動できたことが非常に良かったようだ。今後も、募集をかける地域の検討等をしながら、長く続けていきたい。

○：広報先の学校一覧と実際に利用した学校を比較すると、地元の学校があまり利用していないように思われるがどうか？

▲：学校単位としては利用していないが、当該学校の部活動や生徒会といった単位では利用してもらえている。

○：3泊4日の指導者養成研修について、概要を伺いたい。

▲：他の施設では2泊でやっているところもあり、3泊というのは期間として長い研修である。その中で行ったこととして、自分の施設に置き換えて3泊4日のプログラムを作らせるワークショップは大変好評だった。ただし、せっかく全体指導者の資格をとっても、それを生かすためのシステム、例えば地元の学校にアクセスできるようなシステムが無いことが課題となっていると考えている。

○：当県では、少年自然の家自らが3泊4日の長期宿泊体験事業を来年度から手がけ、その地域のモデルケースとなって、それを学校に還元していくことを目指している。その際には、国立施設で行われている同様の事業を一つのバックボーンにしている。そのため、そういった事業に関する情報提供は国立施設の役割の一つと考えているので、ぜひお願いしたい。その上で、当県で人を集めてここの施設を利用することや、その逆も行って、国と県との相互連携を深めることによって、何かまた新しい道が開けるかもしれないと考えている。

○：グリーンツーリズムの指導者として感じるのは、受講者に内容をしっかり身につけさせるためには、やはり2泊3日では短く、3泊が必要であるということ。また、指導者として登録されても直接学校等から依頼は来ないかもしれないが、各受講者はそれぞれの地区でそれなりに貢献しているのではないかと考えている。グリーンツーリズム協議会からも、自然体験活動養成研修に参加しているメンバーがいるが、是非いろんなことを盛り込んで、国でなければ、こういう施設でなければ出来ない研修を行っていただきたい。

○：ここの施設の良さは自然であるので、もっと自然を前面に出してアピールした方がいい。自然から学ぶことはたくさんある。また、ガイドの方も、実際に利用してみて、自然に精通なされた方であった。その他、地域復興における国と地域との連携の中で、高いレベルの復興教育プログラムを国の施設で教える機会を是非持って欲しい。

○：出前講座をもっとアピールしたほうがいい。また、雪のない地域の子供たちにとっては、ある

程度の期間、雪を体験する雪上体験プログラムは非常に魅力的なプログラムである。スノーシューとか、雪の中での遊びとかに関するプログラムを開発してはどうか？

- ▲：出前講座は要望があればどんどん行きたいと考えている。また、雪のプログラムについても、そり滑りやイグルー作りなど、いろいろ作って普及していきたいと考えている。
- ：被災地の子供たちを考えると、山の体験というのがない子供たちである。そのような子供たちに山の魅力を伝えることも大事な教育活動だと考える。
- ：学校に利用してもらう際に問題となるのは移動手段であるが、所バスの運行はどのようになっているか？
- ▲：片道1時間30分圏内である。南の方だと紫波町、北の方だと八幡平市辺りまでである。その他、近隣の盛岡市や雫石町等へ送迎を行っている。
- ：今回の震災においては、報道する側、特に編集マンが精神的にまいってしまう例がかなりの数に上っている。このことを考えたとき、被災者支援の事業の中でキャンプファイヤーを行った場合、フラッシュバックを起こす子供が出てくることが考えられる。実際に、震災によって沿岸部から内陸部に転校してきた子供の中には、プールに入れない子供も出てきている。したがって、被災者支援の事業においては心理療法士等の協力を得て、心のケアをしながら全体のプログラムを組んでいくことが大事であると考えます。
- ：児童養護施設と連携して行った事業「タートルズキャンプ」について、概要を伺いたい。
- ▲：事業の前に事前に顔合わせをし、当施設の概要をDVDで紹介して、少しでも参加児童の心を解かしてから事業に参加してもらうようにした。また、養護施設の職員から各参加児童の特徴について情報を得ておき、対応の仕方等については専門職内で話し合うなど、細かい配慮をして事業を行った。さらに事業終了時にはDVDで振り返りの時間を持つなどのアフターケアをした。その結果、参加児童は専門職・大人に対して少しでも心を開いてくれるようになり、当該参加児童が他のイベントで当施設を利用した際には、他の子供たちに当施設を案内するようになるなど、参加児童のCゾーン(comfortable zone)がどんどん広がってきていることが感じられた。なお、不登校不適応児童生徒を対象にした事業を2月に予定している。
- ：登録ボランティア制度のメリットについて伺いたい。
- ▲：当施設では、ボランティアは単なるお手伝いとは考えていない。一緒にいろんな事業を運営していくことが大切であり、そのことによってボランティアと職員がともに成長し、それが施設の活性化につながっていることが最大のメリットだと考えている。
- ：私は盛岡大学の学生で、施設ボランティアとして3年目になる。施設の運営に職員と一緒に携わることによって、自分なりの子供観、教育観を大学生のうちに持つことができた。自分の成長を実感できている。
- ：盛岡大学の教員として一言コメントする。本学の学生がここの施設の運営に有益な役割を果たしていることは、本学にとっても非常に重要なことだと思っている。そして、さらに多くの学生に参加させることを目的として、ここのボランティアを経験することに対して単位を認定する科目である「社会教育活動実習」をつくった。施設ボランティアは、教室の中や教育実習では教えられないこと、経験できないことを体験できる非常に有益な教育活動であると考えている。
- ：盛岡大学以外の学生を多く参加させるために、どのようなことをしているか？
- ▲：各大学の先生方を通じて広報をしているが、まずは当施設の活動を理解してもらうところをスタートとして始めている。
- ：震災によって施設や器具が使えなくなった学校は、その代わりにどれくらいここの施設を利用しているのか？
- ▲：県南青少年の家の方にはかなり行っているみたいだが、当施設にはあまり来ていない。

以上